

〔沙石集^二上〕佛舍利感得人事

法華ニハ舍利弗モシンヲ以テ入レリト説キ、シン無キ者ヲバ一闍提ト名テ、佛ニナラヌ者トイヘリ、或在家人山寺ノ僧ヲシンジ、世間出世フカクタノミテ、病事モ有レバ藥マデモ問ケリ、此僧醫骨モナカリケレバ、ヨロヅノ病ニ藤ノ疣ヲ煎ジテ、メセトゾヲシヘケル、シンジテコレヲモチフルニ、ヨロヅノ病イヘズトイフコトナシ、或時馬ヲウジナヒテ、イカバ仕ルベキトイヘバ、例ノ藤ノ疣ヲセンジテメセトイフ、心得ガタケレドモ、ヤウゾ有覽トシンジテ、アマリニ取盡シテ、近ニハ無カリケレバ、山ノ麓ヲ尋ケルホドニ、谷ノホトリニテ、ウセタル馬ヲ見ツケテケリ、是モ信ノイタス所也、

〔建内記〕永享十一年二月廿八日、藤一本近年不慮感得植庭前、或人云、藤ハ初而不植之、不敬之時有其恐之故也、云々、仍奉送淨花院鎮守也、彼五社之内春日御座之謂也、住持返報慇懃候也、

〔鷲峯文集^九〕古藤記

肥後國士沼田延兼、寓東武、依紹介請余曰、延兼庭砌有古藤樹、花白蔓大、其枝高而縈枯木構架於其下、三段、橫施可八九步、國中分栽其根、處處有之、皆以是爲本、^{○中}藤有兩種、或白或紫、彼其紫也、間色不正、不免奪朱之論、此其白也、如梅蘂之破冰雪、似櫻蕊之垂絲綸、并得梅櫻之美、而兼備蔓藹延、則花中之尤物、可無比倫、延兼所誇說、不爲過乎、乃知一庭之中、不可羨刁氏之塢也、

〔國花萬葉記^{六之三}〕大坂諸所名藤之棚

谷町玉木町觀音堂 同大藤棚 天王寺 寺町 洞岩寺ノ藤 同大乘寺ノ藤 天滿天神ノ内ノ藤 同

老松町ノ藤 同神明社ノ藤 木津唯專寺ノ藤 野田ノ藤

〔續江戸砂子^五〕雜樹

龜戸の藤 天神のみたらし 佃の藤 住吉の社 山王の藤 上野 根岸の藤 圓光寺